軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート 60

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

“装蹄師の卵たちへの研修を終えて”

平成26年度軽種馬経営高度化指導研修(軽種馬経営技術指導者養成・技術普及)事業の一環として、平成26年6月17日、日本装削蹄協会が行う1年間の装蹄師認定講習会の受講生を対象に、講義をしてきました。この研修会の受講生は、毎年7月下旬に北海道実習を行っているので、日高を訪ねる前に生産地の肢蹄管理に関する実態を予備知識として理解させておきたいとの主旨で、昨年に引き続き実施されました。

講演内容

「アシや蹄を学ぶ」

最初に肢蹄に関する基本として装蹄の目的、前肢と後肢の役割、JRAの競走蹄鉄、蹄の成長と生長、蹄の色について説明を行った後、子馬の肢軸異常の判定基準の基本的な考え方として、X脚のスライドを用いてGrade１～３(軽度～重度)の評価方法について、肢軸を評価する場合の注意点として、駐立時には自由あるいは楽な肢勢をとることが多いため、常歩で歩かせ、踏着時の瞬間に肢軸の異常を見極めるという、歩様検査を重視した判定が大切であると解説しました。

次いで各種肢軸異常、X脚、球節内反、O脚の症例等について矯正過程を説明、子馬には自然治癒力があって、自然に治ってしまう場合もあるが、治り難い場合の対処法として、矯正用シューズ、張出しプレートや充填剤を使った矯正法を紹介、自然に治癒する場合と自然には治らない症例の見極めはできないので、経過を良く観察することが大事です。基本的には、先天性の異常であれば３～４ヵ月齢までに治して置くことが望ましく、経過が長引けば治り難くなるので、必要に応じた充填剤や矯正用のシューズやプレートなどの使用も必要であり、初期段階のうちに見つけて適切な対処をすれば、その多くは良化すると解説しました。

また、模式図を使って浅屈腱と深屈腱の主な働きを説明後、浅屈腱拘縮である突球、深屈腱拘縮のClub Footの発症要因、確認方法、Grade１～４、発症メカニズムを説明した後、症例を用いた対処法では、運動制限、薬物療法、充填剤応用を解説しました。また、処置に無反応であったり、処置が遅れた場合のGrade３や４への深屈腱支持靭帯の切断例についても経過を示しました。Club Footが残存し、不同蹄となった場合の馬の価値の低下や競走馬としてのリスク、あるいは狭窄蹄矯正用Hinge Spring Shoeの効果を紹介しました。

さらに、手入れ不足の繁殖牝馬の写真を用い、４ Point Trimの方法や繁殖牝馬の蹄の変形や蹄病に罹患した場合の胎児や生まれてからの子馬への影響等についても説明しました。

「肢蹄矯正や保護材料あれこれ」

矯正や保護材料としてCarbonとKevlarを綾織りした布(米国：Cobra sox)は、レース用自動車のボンネットやアタッシュケース等、Kevlar平織り布は、防弾チョッキや防火ズキン等が本来の用途であるが、これらの素材の持っている耐引張、高強度、耐摩耗、耐衝撃等を利用し、蹄に接着して肢軸矯正や蹄の保護に応用している症例やコイル状のHorse Slips、型にアドヒヤーを充填するQuix Shoeの接着方法等について説明しました。

実習内容

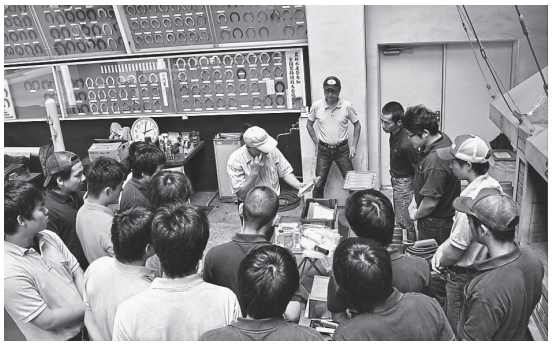
肢軸矯正用の張出しプレートや矯正用シューズを使った蹄保護法や各種矯正法について、輪切りにした孟宗竹を蹄に見立て、それぞれの用途に応じた接着法を講師が紹介した後、生徒が実習しました。また、蹄の保護に用いるHorse SlipsやQuix Shoeについて講師が紹介しました。

おわりに

生徒は４月に入講して３ヵ月足らずで、一般的な装削蹄に関する基礎知識や技術を習得し始めたばかりのかけ出しであり、また生産地からの生徒は、三石と青森の各１名という状況でありました。成馬には接する経験はあっても、生産地の子馬やその矯正、あるいは繁殖牝馬を見たこともない者がほとんどであり、座学での質疑はありませんでしたが、実習では、孟宗竹を蹄に見立てて熱心に充填剤の使用法を実践していました。最後には、子馬の肢蹄異常の増加の原因、肢蹄矯正時に使う充填剤の選定方法、装着時期や期間、ポイント、あるいは狭窄蹄矯正用のHinge Spring Shoeの装着時期等について、生徒からも忌憚のない意見が出され、内容の濃い質疑応答が行われました。

今回の研修で得た生産地の予備知識を持って、７月の北海道研修に参加するということで、一味違った中身のある北海道研修となることを期待したいところです。

Club Footの説明


ヴェテック社製充填剤アドヒヤーの説明